

玉里文庫所藏文之玄昌『南浦文集』について

上ノ原 怜那

はじめに

文之玄昌（一五五五—一六二〇）は、桂庵玄樹を祖とする薩南學派の一人で、島津氏のもとで外交に活躍した禪僧である。章句、訓詁に秀で、『四書集註』や『周易傳義』などに文之點と呼ばれる訓點を施した。この文之點は、近世における漢文訓讀史に多大な影響を与えている。また、文之の遺した数々の詩文は、種子島への鐵砲傳來を記した「鐵砲記」に代表されるように、これまで史料としての價值を有してきた。

伊地知季安の著した『漢學紀源』によれば、文之は名は玄昌、字は文之、姓は傳わっていないが、湯佐もしくは和仁と言われている。南浦や懶雲と號し、軒を雲興、齋を時習と名付ける。生まれは日向國外浦（現在の宮崎縣日南市南郷町）である。

幼少期、文之の才能を見込んだ父から、目井津（現在の宮崎縣日南市南郷町）にある延命寺の天澤和尚に預けられる。天澤和尚により法華經を授けられた文之は、その才によって周りから文殊童と呼ばれるようになる。文之の才を見込んだ天澤和尚は、龍源寺（現在の宮崎縣串間

市市木に存在する）の一翁玄心に就學を依頼する。一翁は桂庵の孫弟子にあたる。この時文之十三歳であった。名を玄昌というのは、文之を佛門に入れた、この一翁が與えた法諱である。また文之という號は、同じ頃に京都五山第二、相國寺の仁如集堯が與えたものである。この頃から既に五山僧との接點を持っていた。その後都へ遊學し、京都五山第四、東福寺に勤めることとなる。

轉機が訪れるのは、天正十九年（一五九二）、文之三十七歳の時である。文之の儒學の評判を聞いた島津義久が、正興寺（現在の鹿兒島縣霧島市隼人町に跡地が存在する）と、安國寺（現在の鹿兒島縣始良市加治木町に存在したとされる）との兩古刹を管理させたのである。それから生涯にわたって島津氏に仕えることとなる。僧として學問を講じるだけでなく、外交文書の作成を通して政治にも関わっていた。同じく島津氏に仕えていた明の易學者、江夏友賢からは易學も學んでいる。

慶長八年（一六〇三）、關ヶ原の戦いに敗れ薩摩に逃れた宇喜多秀家の助命を請うため徳川家康に謁見したことをきっかけに、家康から鎌倉五山第一、建長寺の住持に任ぜられ、翌年島津のもとに戻っている。慶長十六年（一六一一）には大龍寺（現在の鹿兒島縣鹿兒島市大龍町に跡

地が存在する」を開山してその管理をすることになる。島津義久・義弘・家久の三代に渡って仕えた文之は、元和六年（一六二〇）病により六十六歳で没し、安國寺に葬られた。

文之は多くの詩文を遺しており、その詩文集は『南浦文集』と總稱される。『南浦文集』には版本と寫本との二系統が存在し、収録されている詩文の數や内容に違いが見られる。これらの詩文は史料として利用されながら、『南浦文集』の構成や版本と寫本との關係等明らかになつていないことも多い。特に、文之の自筆本として扱われてきた寫本である鹿児島大學附屬圖書館所藏『南浦文集』にはその體裁に一貫性がないといった問題がある。本稿では、この寫本について様々な角度から検討し、版本との關連性についても考察したい。

一 『南浦文集』三種の版本について

「國書データベース」によれば、現在知られている『南浦文集』には寫本、版本、活版本がある。まず版本の種類と寫本・版本間の構成の違いを明らかにしておきたい。

明治・大正期の新聞記者・漢學者として知られる西村天囚は、『日本宋學史』の中で、『南浦文集』の諸本について四種類あると述べる。すなわち寛永二年（一六二五）本、寛永六年（一六二九）本、慶安二年（一六四九）本、古寫六冊本である。

一つ目は寛永二年（一六二五）古活字版である。『南浦文集』卷之上・中・下の三卷本である。上・中巻は文のみの収録であり、下巻は卷末の文二篇以外は詩を収録している。各巻の初めには目録がついており、それによると計百八の詩文が収められている。卷之上「勉學文」・「刻石文」・「觀音經配帙」・「記夢」、卷之中「惟孝字說」・「祭一

唯參公文」・「答安南國書」・「答白濱覺左公書」・「呈佐鋪王子書」・「妙富下火」・「弔諸亡神」、卷之下「和榮信二翁詩并序」・「感懷二首并序」・「和入山老禪師十三首」は、後述する寫本には収録されていない詩文である。なお、「和入山老詩序」・「漫興二首序」・「漫興五首序」・「贈樂師道味詩序」・「討琉球詩序」は、本來存在するはずの詩が「詩見別集」として記されておらず、序のみが記されている。卷之下卷末には、「寛永乙丑仲秋四條寺町校正刊行」との刊記がある。寛永乙丑とは寛永二年（一六二五）であり、西村天囚は、「如竹の編刊せるは此の本ならん」と記している。

ここで言う如竹とは、泊如竹（一五七〇—一六五五）のことで、文之の弟子として最も名を馳せた人物である。ただ、寛永二年版には、如竹による跋文などは付いていない。しかし、文之の著作やその訓點が記された書物の出版を精力的に行っていたのは、如竹その人である。文之の死後、如竹は伊勢津藩主である藤堂氏の元で朱子學の講義を行っており、その援助を受けられる立場にあった。加えて、書肆の集まる京に地理的に近く、出版を計畫するには最適の環境に置かれていたことがうかがえる。如竹は、寛永元年（一六二四）に桂庵の『家法倭點』を、翌二年に文之の點による『四書集註』を、同四年に『周易傳義大全』を出版したと言われている。文之の高弟であり、且つ出版を計畫し實行に移せた人物は、如竹を描いて他にはいない。そして如竹の跋文が付され、確實に如竹による出版であることが確認できる『四書集註』の刊行年と、『南浦文集』の刊行年が、寛永二年で一致するのである。このことから、西村天囚の述べるように、寛永二年版は如竹による編刊と言つて間違いないだろう。

二つ目は、寛永六年（一六二九）版である。『國書總目録』には水戸

彰考館一箇所のみ所藏の三卷三冊本と記されている。しかし、小此木敏明『南浦文集』の版本と文之・恭畏の論争⁸⁾によれば、次のようにその存在が疑問視されている。

鹿兒島大學の玉里文庫には、『南浦文集』の他に『南浦戲言』『南浦棹歌』といった文之の自筆と言われる寫本が現存する。一方、『南浦文集』の版本には、寛永二年（二六二五）の古活字本（三卷三冊）と慶安二年の整版本（三卷三冊）がある。この他に寛永六年版があるとされるが、確認できない。

水戸彰考館は震災・戦禍により、その藏書の多くが焼失しているため、現在では原本を確認することができないものも多い⁹⁾。また、小此木氏は慶安二年（二六四九）版の跋文を引用した上で跋文本の末尾にある「寛永己巳」（寛永六年）という記述に注目し、「寛永六年版とは、この跋文の記述から推測されたのだろう」と指摘した上で「慶安二年版の底本が寛永六年の編集」であったと結論づける。つまり寛永六年（一六二九）版は存在せず、慶安二年（二六四九）版の末尾に、跋文が最初に作成された年である「寛永己巳」（寛永六年）という記載があった。慶安二年（一六四九）版にはもともと「慶安二曆」という刊記が付いていたが、何らかの理由によつてこの刊記が削除された版があったので、そのため後世寛永六年（二六二九）の刊行と誤つて認識されてしまったということが考えられる。現在の版本の所在状況や、先行研究でも寛永六年（二六二九）版に目を通したという記述が一切見当たらないことを考えると、小此木氏が指摘するように、寛永六年（二六二九）版はそもそも存在していないのではないかと思われる。西

村天因は「慶安本は寛永六年本の再刊なるや明なり」と述べているが、寛永六年（一六二九）版が存在しないとすれば、訂正が必要なのは言うまでもない。

三つ目は慶安二年（二六四九）版¹⁰⁾である。寛永二年（二六二五）版と同様に、卷之上・中・下の三卷本である。各卷首の目録によれば、計百二十二の詩文が収められている。卷之上「勉學文」・「刻石文」・「觀音經配帙」、卷之中「惟孝字說」・「祭一唯參公文」・「答安南國書」・「答白濱覺左公書」・「呈佐鋪王子書」・「和榮信二翁詩并序」、卷之下「和人山老禪師十三首」・「奉和玄與尊翁狂歌之尊韻謝桔梗之惠付三首」・「偈語二章書以贈二少年」・「戲歌二首」・「答平氏宗親公書音俳諧付雜戲言」・「寄僧徒詩」・「和左金吾狂詩三篇付俳諧五首」・「元三漫興二首」は、後述する寫本には收録されていない詩文であり、これは寛永二年版と重なる部分が多い。また、卷之中目録に見える「感懷二首并序」・「答貞昌公詩」は、本文が抜け落ちてゐる。寛永二年（二六二五）版と異なるのは、こちらは整版であり、訓點がついている點である。卷首には、それぞれ「南浦文集卷之上」、「南浦文集卷之中」と書かれている。ただし卷之下のみ「南浦文集卷之下」の下に小字で「戲言」と書かれている。卷之上は文のみ收録、卷之中は前半が文、後半が詩を收録しており、卷之下は詩文混交となっている。

以上のように、現存する版本は寛永二年（二六二五）版と慶安二年（二六四九）版の二種ということになり、これらは各卷の構成や收録する詩文に若干の差はあるものの、『南浦文集』と題すること及び三卷本という點で共通している。

二 玉里文庫所藏寫本について

前掲の『日本宋學史』の中で、西村天囚は『南浦文集』に「古寫六冊本」があると述べている。その六冊本こそ、本稿で考察する玉里文庫所藏寫本である。この寫本は鹿児島大學附屬圖書館玉里文庫に所藏されており、『南浦文集』二冊、『南浦戲言』一冊、『南浦棹歌』三冊の計六冊から成る。形態は大本で、各冊とも布表紙である。また、それぞれに「玄昌」の朱印が押されている。六冊通して文八十一篇、詩千六百十七首、計千六百九十八の詩文が收録されている。冊次を示す記述がないため、『玉里文庫目錄』に従い、ここではそれぞれ一冊目、二冊目と呼稱する。

①『南浦文集』一冊目

巻首題あり。八十四丁からなり、文六十四篇が收録されている。文之の作として著名な「鐵炮記」を始めとする外交文書等は、主としてここに收録されている。半葉十三行、行二十一字の體裁をとり、これは②③④⑤も同様である。

②『南浦文集』二冊目

巻首題なし。六十丁からなり、詩三百九十九首が收録されている。唱和詩や詠物詩、詠史詩などその種類は多様である。

③『南浦戲言』

巻首題あり。四十六丁からなり、詩文混交である。計三百十五の詩文のうち、四篇が文である。

④『南浦棹歌』一冊目

巻首題あり。六十六丁からなる。詩四百六十七首が收録されている。

⑤『南浦棹歌』二冊目

玉里文庫所藏文之玄昌『南浦文集』について

巻首題なし。五十二丁からなり、詩文混交である。計二百九十六の詩文のうち、九篇が文である。

⑥『南浦棹歌』三冊目

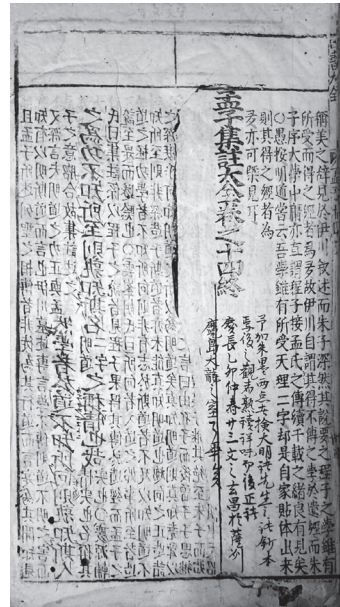
巻首題あり。三十三丁からなり、詩文混交である。計百五十五の詩文のうち、四篇が文である。行數、字數など體裁が一貫していない。

玉里文庫所藏寫本は、版本と異なり、それぞれ「文集」「戲言」「棹歌」と題すること及び六冊本であることが特徴である。この六冊について、『玉里文庫目錄』では以下のように解題を記す。

南浦文集、南浦戲言、南浦棹歌の三者は、いずれも各冊記載の詩文の初頭に文之の名である玄昌の朱印があり、書體の上からみても、まず同一人の手になるものとして、文之の自筆本とされている。別人の手になるものと確認される文之和尙の遷化の年月日の書き込みの書體が、南浦棹歌のもの（特に該書第三冊の前半に記載されて居る筆寫）と類似しているのではないかとの疑問のもとに、全部分を自筆と斷定するのは首肯し難いとの説がある。

まず、玉里文庫本は、同一人物による筆跡ということで基本的に文之の自筆本として扱われてきた。玉里文庫所藏『南浦文集』の他に文之の筆跡と傳わるものに、慶應義塾大學附屬研究所道文庫藏『四書集註大全』（明刊本）の書き入れがある。本書には訓點が書き入れられており、これが文之の自筆であると言われる。

文之の筆と傳わるのは、畫像1のような加點識語が見られるからで

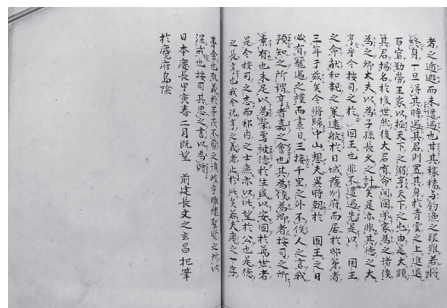


畫像 1

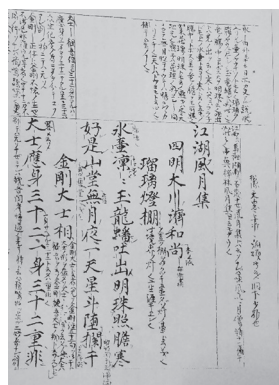
ある。ここに「慶長乙卯仲春廿三文之玄昌於薩州覽島大龍之室了畢矣」とある。慶長乙卯は慶長二十年（二六一五）で、文之が大龍寺の開山となったのが慶長十六年（二六一一）である。文之は自身が管理する大龍寺にて、付訓作業を行った。なお『四書集註』だけでなく、『黃石公素書』の校正補訂も同年に行うなど、文之にとつて慶長二十年（二六一五）は、自らの所有する資料を整理する期間となつていたようである。

この筆跡は、畫像2のように、玉里文庫所藏『南浦文集』本文の筆跡と類似している。また、訓點の書き入れ方や朱の入れ方も、『南浦文集』と同様である。

また、石川武美記念圖書館成實堂文庫藏『襟帶集』二巻も、文之の自筆と傳わっている。⁽¹⁾『成實堂善本書目』（民友社 一九三三年）には、「室町末期寫本。永祿十三年文之玄昌自筆。」と記されている。確認したところ、畫像3のように、玉里文庫藏『南浦文集』の本文の筆跡と類似していることが分かる。



畫像 2



畫像 3

しこの別人による筆跡は、六冊中わずか八丁のみであり、加えてその部分には明らかに料紙を繼いだ跡が見える。つまりこれは後から詩文集に付け加わった部分であることは明白であるが、この八丁を除けば玉里文庫藏本は、文之自筆と傳わる斯道文庫所藏『四書集註大全』の

なお、前掲の『玉里文庫目録』解題の後半部には、「別人の手になるものと確認される文之和尚の遷化の年月日の書き込みの書體が、南浦棹歌のもの（特に該書第三冊の前半に記載されて居る筆寫）と類似しているのではないかとの疑問のもとに、全部分を自筆と斷定するのは首肯し難いとの説がある。」とある。また、神谷成三氏は「文之和尙の生涯（下）」（文化報告）第五號 鹿兒島大學教養部 一九六九年）の中で、「南浦棹歌の後半には、丁巳の作で、全く別人の筆である、六十首」があると述べる。これは『南浦棹歌』三冊目にある記述を指している。しか

書き入れ、及び成簣堂文庫所藏『襟帶集』と筆跡が一致しており、文之の自筆であると推定される。^⑮

ところで、この寫本はいつ頃成立したものでしょうか。寫本『南浦文集』六冊について言及する最も早い例は、「大龍開山文之大和尚行狀」^⑯だと思われる。これは、大龍寺五代目住持の慈宣が、元祿三年（二六九〇）に記したものである。ここに「南浦文集六卷行于世」との記述が見える。従つて、少なくとも元祿三年（二六九〇）頃には、現在のように六冊の『南浦文集』が存在していたと思われる。また、正徳元年（一七一二）に大龍寺七代目住持の宗玉が記したという「大龍寺遺緒書」^⑰のなかには、「寶物 一南浦文集一部 但六冊、開山文之和尚自筆」と記されている。玉里文庫所藏寫本六冊が、もとは大龍寺に所藏されており、同時に文之の自筆と傳わつていたことが分かる。さらに、享和二年（一八〇二）に成立した『島津國史』の「南浦文集」の注には次のように記述する。^⑱

近聞大龍寺藏其寫本。借而觀之、其詩文一百九十餘首、與印本同。其外一千二百餘首、印本所無。合一千四百餘首、編爲六冊。無卷數目錄、其字亦佳。相傳以爲玄昌手筆。題曰南浦棹歌者、詩多可誦。他日庶鏤諸版云爾。

近く聞く、大龍寺其の寫本を藏すと。借りて之を觀るに、其の詩文一百九十餘首は、印本と同じ。其の外一千二百餘首は、印本に無き所なり。合して一千四百餘首、編じて六冊と爲す。卷數目錄無く、其の字も亦た佳し。相ひ傳はるに以て玄昌の手筆と爲すと。題に南浦棹歌と曰ふは、詩多く誦すべし。他日庶^{（い）}くは諸を版に鏤^{（ちり）}めんと爾云ふ。

玉里文庫所藏文之玄昌『南浦文集』について

この『島津國史』の注に記載する大龍寺所藏の『南浦文集』は、收録される詩文の數等の特徴からも、現在の玉里文庫所藏の寫本と確かに同一のものであると言える。

ただ、寫本『南浦文集』が所藏されていた大龍寺は文之が開山であるが、萬治元年（一六五八）に三代目住持の一溪が亡くなった後二十一年にわたり住持不在であり、その間十年ほどは廢寺であつた。その間の経緯について「大龍寺由緒覺」^⑲は以下のように記す。

一三代一溪守榮

……右一溪儀、萬治元年戌八月相果、夫ヨリ延寶六年迄廿年餘無住、其内廢寺ニ罷成候儀十ヶ年餘リニテ有之候事、……

一大龍寺御再興ニ付、即宗院・南昌院江新納五郎右衛門久中ヨリ之書簡並住僧之儀付、即宗院江岩切彦兵衛ヨリ之書簡、于今龍吟庵文庫ニ格護御座候事、

ここに萬治元年（一六五八）より延寶六年（二六七八）の二十年間住持が不在とあり、貞享三年（一六八六）、慈宣が五代目住持となつたことによつてようやく大龍寺は復興を果たしたのである。このように、玉里文庫所藏寫本が現在の六冊として成立した正確な時期については斷定できないが、元祿三年（二六九〇）には間違いなく存在していたと言えよう。

三 慶安二年（一六四九）版の編纂者

本稿で考察対象とする玉里文庫所藏寫本については、その編纂の経

緯や構成など、明らかでないことが多い。それらを考察する際に注目すべきは、慶安二年（一六四九）版『南浦文集』巻之下（戲言）巻末に記されている次の跋文である。（割注は括弧で記す。）

南浦戲言、前建長文之老師（薩州人）之所作也。諱玄昌、南禪大明祖九世之遠孫而桂庵翁四世之的孫也。老師生于日州南郷外浦、故自名南浦。又東福龍吟庵之門葉也、故其軒號雲興蓋取于龍吟雲興之義也。或曰懶雲、或曰狂雲、皆其義也。老師在世之日、以所自著之詩文使予謄寫焉。然詩與文混雜而不分其部類、不定其卷帙、辭世之後、予始表章之、又編次之別爲三卷（文集一卷、詩集一卷、戲言一卷）。今壽之於梓以遺愛於後昆云。寛永己巳季秋下澣末裔正圓謹書

南浦戲言は、前建長文之老師（薩州人）の作る所なり。諱は玄昌、南禪大明祖九世の遠孫にして、桂庵翁四世の的孫なり。老師日州南郷外浦に生まれ、故に自ら南浦と名づく。又た東福龍吟庵の門葉なり、故に其の軒號雲興は蓋し龍吟雲興の義に取れるなり。或は懶雲と曰ひ、或は狂雲と曰ふは、皆其の義なり。老師在世の日、自ら著す所の詩文を以て予をして焉を謄寫せしむ。然るに詩と文と混雜して、其の部類を分かつ、其の卷帙を定めず。辭世の後、予始めて之を表章し、又た之を編次して別ちて三卷と爲す。（文集一卷、詩集一卷、戲言一卷）。今之を梓に壽しくし、以て後昆に遺愛すと云ふ。寛永己巳季秋下澣、末裔正圓謹書^①

文末に言うように、この跋文の作者は正圓で、彼は文之が在世の時、詩文混交で分類や卷次が定まっていなかった詩文を文之の命によつて

書き寫し、文之の死後、それらを整理し刊行に至つたのだという。正圓という人物については、文之が訓點を付けた、宮内廳書陵部所藏『周易傳義大全』（401/13）に、次のような識語がある。^②

此一冊倭點正圓加之、莫與老師倭點一樣看
寛永四年丁卯仲冬之日 海西破衲惟方正圓書于武之江城
此一冊倭點正圓漫加之觀者勿做老師之點
（卷二二）
（卷二四）

宮内廳所藏『周易傳義大全』には、文之が訓點を付した部分と、正圓が付した部分が混在しているようである。この識語は正圓自身が書いたものであり、「老師」、つまり文之の訓點と、自身による訓點を混同することがないようにと言うのである。正圓が文之自筆の『周易傳義大全』を入手し、文之がやり残した部分の付訓を、寛永四年（一六二七）に「武之江城」（江戸）にて行つたこと、さらに自らを「海西」の僧であると自稱していることが分かる。まず注目すべきは、正圓は文之の自筆本を入手し、完成されていなかった訓點を補つているという点である。すなわち、正圓は文之自筆の遺作に觸れることが出来、その上そこに自らの手を入れることが出来た人物であつた。前掲の『南浦文集』跋文で、正圓は文之自筆の詩文を謄寫し、編纂したということが確認できるが、『周易傳義大全』の正圓も同様に文之の自筆本を以てそこに變更を加えているのである。前出の小此木氏が指摘するところ、『周易傳義大全』に書き入れた正圓と、『南浦文集』の跋文を記した正圓とは同一人物であり、文之の遺作に觸れられる人物であつたことがうかがえる。さらに、『周易傳義大全』への書き入れは寛永四年（一六二七）、『南浦文集』跋文を記したのは寛永六年（一六二

九)と、時期も近い。

では正圓は、文之の門下であつたのだろうか。村上雅孝氏の論考⁽²³⁾に、正圓の出自に關する考察がある。ここで村上氏は、『周易傳義大全』に如竹と正圓とが關わつていたことを挙げ、兩人に密接な關係があつたと指摘する。文之と文之の高弟如竹、そして正圓との間には確かに深い關係性があつたと考える。『周易經傳』を如竹が刊行した後、文之の自筆本が正圓に渡り、更にそこに正圓が補足したというのが、この如竹と正圓との關係は『南浦文集』の刊行からもうかがえるのである。先に記したように、はじめに文之の詩文集である『南浦文集』を刊行したのは如竹である。これが寛永二年(一六二五)版で、この時には各冊詩文混交である。次に刊行されたのが慶安二年(一六四九)で、ここに正圓の跋文が付されることとなり、如竹の編纂と比して、詩文が明確に分けられた状態で刊行されている。文之の遺作の刊行には、如竹がはじめに計畫し、正圓がそこに自らの手を加え續く、という流れが見えるのである。

正圓に關する資料は少なく、文之關係の資料には見出せないといわれるが、實は、玉里文庫所藏寫本『南浦文集』二冊目及び『南浦棹歌』一冊目には、それぞれ「借上已之韻寄圓公藏主」、「和圓藏主試筆」という詩が存在する。⁽²⁴⁾玉村竹二「禪僧稱號考」(『日本禪宗史論集』上 思文閣 一九七六年)中の「法諱及び道號の組合せ並に使用禮法」にて、禪僧間の二人稱に關しては、法諱のみを用いる場合は後輩に對する書であり、「上の一字(即ち系字)を諱んで、下字のみを以て稱する」と指摘されている。つまり「圓藏主(圓公藏主)」の「圓」は正圓の「圓」である可能性がある。なお藏主というのは、禪寺の經藏を管理する僧職である。「圓藏主」の詳細は不明だが、詩の内容や名の表記

から、文之と關わりのある後輩僧と考えられる。また、文之の弟子には「圓」字の付く僧が見當たらぬ。これらのことから、玉里文庫所藏寫本に見える「圓藏主」は、この正圓の可能性が高い。それならば、文之は詩を遺すほどの關係を正圓と結んでいたということであり、正圓が文之の遺作に觸れられても何ら不思議はない。

また村上氏は前掲の論文で、文之關係資料が寛永初年に集中して刊行されていると指摘し、以下のように推察する。⁽²⁵⁾

この中心になつたのは、如竹や中野道伴であつたろうが、この時代に、出版が本屋の要請だけでできたもののだろうか。……これはやはり、薩南學という桂庵以來の傳統ある學派の意圖的な活動ではないかと思うのである。その活動の場としては、色々な意味で江戸が最もふさわしい所ではなかつたかと思われるのである。……かの正圓の存在は、このような推測の下で生きてくるのである。つまり、正圓は、このグループに参加し、活動するために上京した一人だったということになる。正圓は文之の下で原本を寫し、副本を作つて所持していたからである。

正圓が『周易傳義大全』の副本を所持していたというのは、『南浦文集』を書寫していたという記述と同じく文之との關係性をうかがわせる。『南浦文集』もこのような薩南學派の活動の中で編纂され出版された可能性が高い。

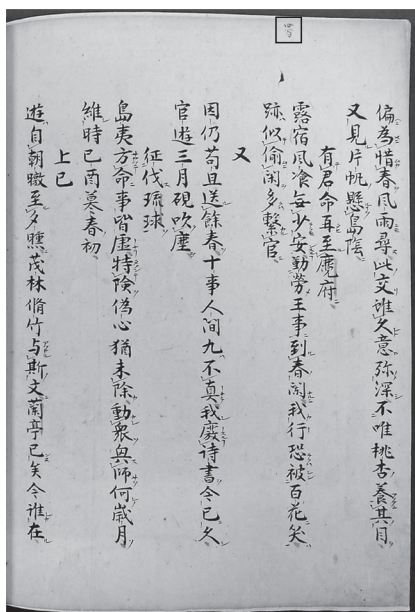
そして、前掲した正圓の跋文で注目すべきは、正圓が文之の詩文集一卷、詩集一卷、戲言一卷に編纂したという記載である。

四 玉里文庫所藏寫本の書き入れについて

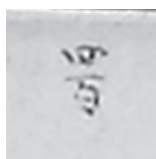
玉里文庫所藏寫本には書き入れが散見される。これは目付を記したもののや、文之の没年を記したものなど、文之以外の筆蹟によるものも多い。その中で特に目を引くのが、数字の書き入れである。数字は④⑤⑥『南浦棹歌』各三冊と②『南浦文集』二冊目に書き入れられており、これは一見すると、各巻における詩の数を数えたものではないかと思わせる。ところが現状の玉里文庫所藏寫本においては、書き入れられた詩の数も、その数字の順番も多くが合致しないことに気づいた。しかも、この数字については從來全く注目されていない。そこで、これまで議論されてこなかったこれら数字の書き入れに着目し、実際に収録されている詩の数との関連性を検討し、書き入れられた数字は一體何を意味しているのかということを探りたい。

まずは詩のみ収録の④『南浦棹歌』一冊目と②『南浦文集』二冊目をとりあげる。④『南浦棹歌』一冊目には、三十一丁裏に「二百」、四十五丁裏に「三百」、五十八丁裏に「四百」(畫像4)の書き入れがある。②『南浦文集』二冊目には、五丁裏に「五百」、十八丁裏に「六百」、三十二丁表に「七百」、四十八丁表に「八百」とあり、六十丁裏には「至於此八百七十二首」と書き入れられている^②。

以上二冊の書き入れを見ていくと、④『南浦棹歌』一冊目から②『南浦文集』二冊目までは、「二百」、「三百」、「四百」、「五百」、「六百」、「七百」、「八百」と冊子を跨いで作品数が順に付されており、実際に収録されている作品数ともほぼ一致することに気づく。そしてこれら二冊の詩の合計は、「至於此八百七十二首」という書き入れの通りとなる。つまり、この数字に着目すると、④『南浦棹歌』一冊目収



畫像 4



畫像 4
(擴大圖)

録の四百六十七首から、②『南浦文集』二冊目収録の三百九十九首までは詩集として連続していることになり、一冊の詩集としてまとまるのがわかる。實際、④『南浦棹歌』一冊目末尾周邊の詩と②『南浦文集』二冊目冒頭周邊の詩には月日の連続性が見られる。また、④『南浦棹歌』一冊目一丁表には「南浦棹歌」と巻首題が記載されているにも拘らず、②『南浦文集』二冊目には巻首題がなく、丁の初めから詩が記載されている。以上のことから、この二冊に繋がりがあつたのではないかと考えられる。

次に、詩文混交である⑤『南浦棹歌』二冊目を確認したい。書き入
れは九丁裏、朱筆で「至此詩二百七十首也、此卷中之詩也。」とある
ほか、十三丁裏に朱筆で「二百六十」、十四丁裏に朱筆で「二百六十
九」、五十丁裏に同じく朱筆で「二百五十首」(五十の右下に見え消ちで
「五」、左下に「六」と書き入れられている^⑪)。順番が前後するこれら數
字を整理していくと、⑤『南浦棹歌』二冊目は以下の五つに分割でき
ることが分かった。⑦十七丁から五十丁、①十三丁・十四丁、⑨八
丁・九丁、⑤五十一丁、④⑤『南浦棹歌』二冊目收録の文全九篇と、
それら文と同じ料紙に書かれた詩の群、である。⑦から⑨までをこの
通り並べることで、記された數字の順番が整い、「至此詩二百七十首
也、此卷中之詩也。」の記述と實際の作品數とが一致するようになる。
因みに⑤五十一丁表には詩が記載されているが、裏には文之の藏書で
あるうか、書名が書き連ねられている。したがって⑦から⑨までとは
様相を異にする。この④と文を含む④を除くと、⑤『南浦棹歌』二冊
目も、一冊目と同様に詩集として扱うことができるようになるのであ
る^⑫。

ここまで確認してきたことを踏まえ、書き入れられた數字に着目す
ると、「棹歌」というのは詩文混交ではなく純粹な詩集となることが
わかる。⑤『南浦棹歌』二冊目に巻首題がないのも、文が記載され
た料紙が現状の一丁目にきているためであろう。

最後は⑥『南浦棹歌』三冊目である。はじめから二十四丁表までは
詩が記載されているが、二十四丁裏から二十六丁表までは空欄が續き、
二十七丁表から「淨光明寺上梁文」が挿入されている。⑥『南浦棹
歌』三冊目中の文四篇とは、この「淨光明寺上梁文」とその後巻末ま
で續く三篇であり、詩と文とは完全に分離していることがうかがえる。

三冊目も二冊目と同じく書き入れに着目すると、「棹歌」という詩集
になる。數字の書き入れは、二丁表、朱筆の「百二十」から以降十首
ごとに「百三十」、「百四十」、「百五十」、「二百六十」、「二百七十」、
「二百八十」とあり、十三丁表の「二百九十」まで實際の詩の數に沿
って記されている。

以上のように數字の書き入れをまとめると、「棹歌」という三冊の
詩集が見えてくる。すなわち、現在の④『南浦棹歌』一冊目から②
『南浦文集』二冊目へと繋がる八百六十六首(散逸した七首を含めれば
八百七十三首)を收録する一冊、現在の⑤『南浦棹歌』二冊目に混在
している、二百七十首を收録する一冊、そして現在の⑥『南浦棹歌』
三冊目の百五十一首を收録する一冊である。數字の書き入れから考察
すると、玉里文庫所藏寫本は現在のような一貫性のない體裁ではなく、
文集である『南浦文集』一冊、詩集である『南浦棹歌』三冊、詩文混
交の『南浦戲言』一冊という一貫性のある構成になることが分かった^⑬。

五 結論

玉里文庫所藏寫本は、目錄に記述するように、文之の自筆または自
筆書き入れ本と言ひ難い部分があった。しかし、玉里文庫所藏寫本の
他に文之の自筆と傳わる、斯道文庫所藏明刊本『四書集註大全』や、
成實堂文庫所藏『襟帶集』を確認したところ、後から付け加えられた
部分を除き、その大部分の筆跡が類似していた。つまり玉里文庫所藏
寫本は、そのほとんどがやはり文之の自筆である事が分かった。

その自筆本には數字の書き入れがあり、それによって見えてきた文
集、詩集、戲言という構成は、實は慶安二年(二六四九)版の跋文に
記されている、正圓の編纂した詩文集の構成と同じであることが分か

る。正圓とは、文之の高弟如竹と關係の深い間柄の人物であつた。それは文之の加點した『周易經傳』がまず如竹の手に渡り刊行された後、正圓に引き繼がれ、その文之の自筆加點本に更に書き入れ補訂したことからうかがえる。また、この文之の著作が如竹から正圓へと渡り、正圓が手を加えるという一連の様相は、まず如竹によつて寛永二年に刊行され、次に正圓によつて再編成され慶安二年の刊行へと繋がる『南浦文集』と同様であることに氣づく。その正圓が書寫し編纂した文之の詩文集の全貌というのは、正圓の自筆本が現在に傳わっていないため確認はできない。しかし、本稿での考察によつて、それが書き入れの數字により、現在の玉里文庫所藏寫本の中に確認できたのである。この書き入れは、正圓が文之の自筆の寫本、つまり玉里文庫所藏寫本を資料として見ながら、跋文に示しているような構成で詩文集を再編纂する際に、書き入れたものではないだろうか。だからこそ、書き入れの數字を整理すると、正圓が跋文で言うような文集、詩集、戲言という構成と合致するのである。正圓が『周易傳義大全』の副本を所持し、文之の加點本が刊行された後、自身でその續きに書き入れるという一連の行爲からも、正圓は文之の遺作に觸れることができ、さらにそこに自身の書き入れを加えることができる立場であつたことがうかがえるのである。

正圓が書いた慶安二年の版本の跋文からも確認できるように、『南浦文集』には、もともと文之の自筆である現在の玉里文庫所藏寫本と、それに基づいて後に正圓が編纂した正圓本があつたと思われる。文之が在世の時には、まだ文之の自身も詩文を完全な詩文集としてまとめはおらず、その状況を知っていた正圓が後に初めてこれらの詩文をまとめようとしたのではないか。現在の玉里文庫所藏寫本の體裁に一貫

性がなく、その編纂が不十分に見えるのは、そもそも文之の詩文をひとまずまとめたにすぎない資料のようなものだったからだと推測できる^③。この資料を見ながら文・詩・戲言の構成として詩文集をまとめたのが正圓であり、その構成を考えたときの痕跡が、玉里文庫所藏寫本に遺る數字の書き入れだと考えられるのである。

注

(1) 『薩藩叢書』第二編(薩藩叢書刊行會 一九〇九年)所收。『漢學紀源』に關しては、東英壽氏に「伊地知季安の『漢學紀源』について」(『鹿兒島大學文科報告』第三十二號第一分冊哲學・倫理學・心理學・國文學・中國文學篇 鹿兒島大學教養部 一九九六年)をはじめとした論考があり、同氏「桂庵と伊地知季安『漢學紀源』 桂庵500年祭に向けて」(二〇〇八年)にまとめて收録されている。

(2) 『南浦文集』には寫本五點、『南浦戲言』には寫本四點、『南浦棹歌』には寫本四點が掲載されている。玉里文庫本以外について略述する。大阪大學圖書館附屬圖書館懷德堂文庫藏本(68/43)および京都大學附屬圖書館藏本(403/ナ/2)は『南浦全集』と稱するもので、『文集』『戲言』『棹歌』を網羅しており、前者が西村天因による玉里文庫本の轉寫本、後者がその再轉寫本である。慶應義塾圖書館幸田文庫藏『文集』(215/514/14)は寛永二年刊本の寫し、東京大學史料編纂所藏二本のうち、『文集』(2034/61)は寛永二年刊本の寫しであるが、もう一本、『國書データベース』に載っていない寫本として、島津家の家譜關係史料所收本(島津家本-I-1333-116)があり、こちらは慶安二年刊本の寫しである。他に、鹿兒島縣立圖書館藏『戲言』(K04/ブ)および『棹歌』(K919/ブ)があり、いずれも玉里文庫本の寫しである。

- (3) 活版本は『薩藩叢書』に収録されている。例言に、「南浦文集は慶安二年中野道伴の刊本に據るも蠹蝕不明の處あり、善本を得て後日増補すべし。文之の著猶疑愚論、決勝記等二三種あれど今日州平治記を併せ録す。」とあるように、慶安二年（一六四九）版に依據している。
- (4) 西村天因『日本宋學史』（杉本梁江堂 一九〇九年）。
- (5) 國立國會圖書館（W7-64）等所藏。
- (6) 笠井助治『近世藩校に於ける學統學派の研究』下（吉川弘文館 一九七〇年）。
- (7) 『漢學紀源』は如竹による編刊を寛永六年版とするが、これは誤りであらう。
- (8) 小此木敏明「『南浦文集』の版本と文之・恭畏の論争」（『日本古書通信』第一〇八二號 二〇一九年）三二頁。
- (9) 『彰考館圖書目録』（八潮書店 初版一九一八年 増補影印一九七七年）。増補影印の際に焼失目録が附された。目録に「南浦文集 玄昌著 寛永己巳秋」として三點著録、うち二點は焼失としている。彰考館が所藏していた書籍類は、現在公益財団法人徳川ミュージアムにて保管されている。ただし、現存の一點については未見である。
- (10) 國立國會圖書館（詩文12873）等所藏。
- (11) 玉里文庫目録作成委員會編『玉里文庫目録』（鹿児島大學附屬圖書館 一九六六年）。
- (12) 注（11）二二九・二三〇頁。
- (13) 『四書集註大全』は、慶應義塾大學附屬研究所斯道文庫にて、二〇二三年八月二十四日に閲覽をし確認した。閲覽の際は斯道文庫長の堀川貴司先生よりご教示を頂きました。深く感謝いたします。
- (14) 玉里文庫藏『南浦文集』一冊目三十八丁表、「書素書後」の記述による。
- (15) 文之自筆とされる『襟帶集』は石川武美記念圖書館成實堂文庫に所藏されており、その複製は『成實堂叢書』第十一篇（民友社 一九一八年）、「禪學典籍叢刊」卷十一（臨川書店 二〇〇〇年）にて確認することができるとがである。『禪學典籍叢刊』の『襟帶集』は、『成實堂叢書』からの影印である。巻末には文之の花押も見られ、『大日本史料』に記載されている文之の花押は、この『襟帶集』のものである。
- (16) 文之の筆跡に關しては、伊藤慎吾「文之玄昌と『聖蹟圖』」（初出は『國語國文』第七十二卷 第七號 中央圖書出版社 二〇〇三年、後に『室町戰國期の文藝とその展開』三彌井書店 二〇一〇年に収録される。）に考察がある。文之自筆の資料として、玉里文庫所藏『南浦文集』以下六冊の寫本や、石川武美記念圖書館成實堂文庫藏『襟帶集』等をあげて文字の特徴を比較し、寛永本『孔子聖蹟之圖』を文之自筆と判定している。
- (17) 『薩州舊記 桂庵南浦事項』所收。東京大學史料編纂所の所藏史料目錄データベース（HICAP）にて閲覽が可能である。
- (18) 注（17）に同じ。
- (19) 山本正誼撰『新刊島津國史』（鹿児島縣地方史學會 一九七二年）一四七頁。
- (20) 『鹿児島縣史料 名越時敏史料十』（二〇二〇年）「群書合輯（十）」所收「大龍寺由緒覺」、及び『鹿児島縣史料 舊記雜錄拾遺 神社調一』（二〇二二年）「鹿児島部 二」所收「瑞雲山 大龍寺」の項參照。
- (21) 注（8）の論文によれば、跋文の「末裔」の後に「正圓謹書」がある版と無い版とがあり、これは早印版と後印版の違いなのだという。
- (22) 宮内廳書陵部所藏『周易傳義大全』に見える正圓については、村上雅孝「文之玄昌と『周易傳義大全』」（『日本文化研究所研究報告』第二十集東北大學文學部附屬日本文化研究施設 一九八九年）にて詳細に考

察されている。

(23) 注(8)参照。

(24) 村上氏は、文之關係資料の刊行には、如竹と並び中野道伴が深く關係していると考ええる。これは、『周易經傳』が、京都の書肆である中野道伴の要請によつて版行に至つたためである。なお、中野道伴は慶安二年版『南浦文集』の刊行者でもある。

(25) 以下に詩本文を載せる。

「借上巳之韻寄圓公藏主」(『南浦文集』二冊目 五十四丁表)

美子才名入筆長 美む子が才名の筆に入りて長きことを

詩篇字字弄春光 詩篇字字春光を弄す

貧居今日猶堪愧 貧居今日猶ほ愧るに堪へたり

唯有茶盃無酒觴 唯だ茶盃のみ有て酒觴無し

「和圓藏主試筆」(『南浦棹歌』一冊目 五十三丁表)

少壯由來又幾辰 少壯由來又幾辰

須令學業與年新 須く學業をして年と新たならしむべし

書窓一刻千金重 書窓の一刻千金重し

莫蹈風塵徒送春 風塵を蹈んで徒に春を送ること莫れ

(26) 注(22)の論文に同じ。

(27) ③『南浦棹歌』一冊目冒頭から数えると、「二百」は二百一首目になるが、数え間違いであろう。以降「四百六十六」まで實際の作品数とは一百分の差異がある。

(28) 「五百」から「六百」までは九十三首存在し、書き入れから考えれば七首足りない。ただし書き入れの筆跡が同じであることから、作品を綴つた料紙が現在一部抜けている状態であると推測できる。

(29) 注(27)及び注(28)に記したように、数え間違いと一部料紙の散逸により、現在確認できる作品数と書き入れの合計数には若干差異が生じ

ている。現在確認できるのは八百六十六首、そこから注(27)で指摘した数え間違いの一首を引き、注(28)で指摘した散逸したと思しき七首を足せば、書き入れの「八百七十二首」の通りとなる。

(30) ③『南浦棹歌』一冊目最後の六十六丁裏には、「立秋之後、僅十餘日」という記述が見られ、④『南浦文集』二冊目一丁表には「八月一日賦白露」という詩題が確認できる。

(31) この他の書き入れとして、まず二十六丁裏に「自始至於此一百」とある。これは、現在の④『南浦文集』二冊目の並びのまま、詩を冒頭から数えた数である。また、十二丁表には、「二百七十」とある。これは、

㉗、㉘、十二丁という順に並べること、その数字は正しくなる。しかし、十二丁には詩だけでなく文が記されている。一度十二丁の詩を二百七十首目として数えた後、詩のみ記された㉙八丁・九丁の詩を二百七十首目とするよう變更した可能性がある。

(32) ただし、二冊目には詩の上からばつ印を付す箇所や、語句の上部に元と異なる語句を書いた紙片を貼付した箇所が見られ、一冊目と比べると體裁が整っていない。また、㉕や㉙が詩集の中に混じつていた點を鑑みるに、④『南浦棹歌』二冊目はもともと詩文が寄せ集められた状態であつたと考えられる。

(33) 料紙の大きさが他五冊と異なることや裏打ちが施されていること、製本の跡が見えることといった特徴が⑥『南浦棹歌』三冊目にはあるが、これは文之の詩文集を保管するにあつて後世修繕する際生じたと考えられる。

(34) 玉里文庫所藏寫本の詩文は、六冊全體を通して、時系列や題材等の一貫性がない並びとなつている。ただ、各所に同年、同時期の詩文のまとまりが存在するのみである。これもやはり、玉里文庫所藏寫本が、ひとまず著作を書き記した程度のもので、詩文集として意圖的に編纂された

ものではないことを示していると考え。

(35) 正圓が資料として見た詩文集の體裁が、現在の玉里文庫所藏寫本の體裁と全く同じであったか否かは定かでない。ただ、現在でも詩と文とが同じ料紙に記される部分が遺っており、慶安二年版の正圓跋文が記す通り、文之自筆本（玉里文庫所藏寫本）は當初から體裁が整っていないかったことは確かだろう。正圓の閱覽後、何らかの理由で更に資料がばらばらになり、後人が再製本したものが現在の玉里文庫所藏寫本となっている可能性も考えられる。しかし、玉里文庫所藏寫本には、各冊の冒頭に「玄昌」の二種の印記が付されている。一つは①『南浦文集』一冊目・②二冊目・③『南浦戲言』に付されたもの（2.42 cm × 2.42 cm）、もう一つはそれ以外の④⑤⑥『南浦棹歌』三冊に付されたもの（2.2 cm × 2.2 cm）である。文之以外となると、誰がいつ押印したかという疑問が残るため、この點に關しては今後の課題としたい。

〔附記〕本稿は、二〇二二年十月十日日本中國學會第七十三回大會において發表した内容に基づいて作成したものです。發表の際に様々なご意見を賜りました。深く感謝いたします。